第５回県立学校入試改善検討委員会（会議録）

平成２３年８月３０日（火）
１４：００～１６：００
岩手県民会館　第２会議室

１　開会（髙橋高校教育課長）

２　県教育委員会あいさつ（菅野教育長）

本日は、これまでの委員会で出された意見をまとめた提言案について協議をお願いしたい。現行の入試制度の基本理念は尊重しながらも、よりよい方向に改善するという視点から様々な意見をいただきたい。

本日の意見をふまえて修正した「提言案」を、９月上旬から１０月上旬にかけて１ヶ月間県のホームページに掲載し、県民から広く意見を聞く予定となっている。

限られた時間ではあるが、忌憚のないご意見をお願いしたい。

３　県立高校入試改善検討委員会委員長あいさつ（望月委員長）

本日の会議では、パブリックコメントに向けてだいたいの方向を決めたい。それぞれの各項目を区切りながら審議をすすめたい。

４　説明・協議

（１）提言(案)について

①「はじめに」について

［里舘指導主事］　資料説明

［髙橋高校教育課長］　補足

今回の入学者選抜制度が中学校及び高等学校の双方の視点からより良いものとなるようにしたい。

②「Ⅰ　現行入試制度の概要」について

［里舘指導主事］　資料説明

［髙橋高校教育課長］　補足

現行の入試制度は平成１６年にスタートし、平成１９年に推薦入試を導入した。

ＡＢＣ選考は、学校裁量に配慮し選考の比率のパターンを36通りから現在の63通りに増やした。多くの学校は特定の比率に集中しているが、パターンが複雑化しており精査の必要がある。また、調査書等の配点についても検討の必要がある。

③「Ⅱ　現行入試制度に係る成果と課題及び主な要望」について

［里舘指導主事］　資料説明

［髙橋委員］

推薦入試の捉え方について、資料の中に「特色ある学校づくり」と「受検機会の複数化」という文言が出てくる。 全員が受検する訳ではない推薦入試を受検機会の複数化ととらえてよいものか。特色ある学校づくりに一本化してはいかがか。

［及川委員］
　高橋委員と同意見である。推薦入試導入の経緯は、それぞれの高校の特色ある学校経営を考えてのものであったはずだ。送り出す中学校側は、生徒一人ひとりの能力や適性が希望する学校と一致する形で受検させる。その両面から見ても、推薦入試導入の意味合いをしっかり説明していけるのではないか。

［髙橋高校教育課長］
　複数化の文言は、当時の文部省の捉え方と、平成１６年の中学校側からの要望から用いた。表現を検討する。

［松尾委員］
　面接について、資料にはその成果が書かれているが、中学校での指導が徹底されており、実際は練習どおりできるかが試される機会となっているのではないか。また、予期せぬ質問にとまどって点数が低くなるようであれば、当初の目的とは違った結果になる場合はないのか。

［玉川委員］
　確かに中学校では、受検前に指導し生徒は練習をして臨む。ただ、その練習の過程で、それまで進路意識が明確でなかった生徒が、目的意識を持ってくることがある。テクニック的なものだけではなく、生き方指導と進路指導という考え方で練習を実施している。

［在原委員］
　予期せぬ質問で本音を引き出すようなことは、殆どの学校でしていないと思う。それよりも、中学生のよい面を引き出したいとの意図が大きい。従って、どうしても質問が平準化する傾向が出てくるが、中学生の発達段階等を考えると、その方が本人のために良いと考える。

［坂本委員］
　在原委員と同意見である。現状では特に問題はない。なかなか自分の気持ちをまとめて表現することができない生徒もおり、中学校で面接指導の機会を設けることには意味がある。

［及川委員］
　１回の面接でその子を見ることは難しいと思うが、自己アピールカードの活用について、その実態を伺いたい。

［清水委員］
　自己アピールカードは自分の良いところを記入しているものである。言葉でなかなか自分のことを伝えられない生徒に、自己アピールカードの内容を質問すると答えられる。
　生徒の得意分野の質問は、その生徒を生かすことに繋がると考えている。自信を持って答えられる質問をするために活用している。

［髙橋高校教育課長］
　高校に入る前に、主張をまとめ、面接で話せるように練習することは大切なことである。将来、社会に出るときの心構えにも繋がると思う。

［谷村委員］
　企業サイドから話をさせてもらう。生徒の能力を引き出すような質問をすると、良い面が見えてくる。良い面を引き出す面接が大切である。その子の持っている特色そのものを引き出すような質問の仕方を工夫する必要がある。

［望月委員長］
　面接は以上にして、別の論点に移る。

［鳩岡委員］
　「主な要望」について。この検討委員会の議論に参加した人は、委員会で出た意見の総意であると分かるが、それ以外の人にも分かるように、要望がまとまった経緯を示す必要があるのではないか。それから、（１）の推薦入試に関して、「学力向上の検討」の部分がストンと落ちない。後の文を読めば、推薦で入学が決まった生徒が、だらけないように勉強するためと分かるが、文言を整理する必要があろうかと思う。

［髙橋高校教育課長］
　最初のご意見については、これまでの検討委員会の協議経過をホームページに掲載してある。各委員から出された意見もご覧頂けるようにしたいと考えている。
　推薦入試の文言は事務局で検討し整理して訂正したい。

［望月委員長］
　今の質問は「はじめに」とも関連することであり、全般的に検討させていただきたいと思う。これ以外で何か補う点があれば事務局お願いしたい。

［髙橋高校教育課長］
　平成１９度入試からの成果と課題になる。成果は多々あるが、推薦入試の再開で、活性化した学校もあれば、課題が発生したという学校もあろうかと思う。今回は特に（１）～（５）について審議をお願いしたいが、これ以外にも何かあれば検討したい。

④「Ⅲ 平成 27 年度以降の県立高校入試に向けた改善」について
［里舘指導主事］　資料説明
［望月委員長］
　県立高校入試に向けた改善事項を枠ごとに検討する形で審議を進めたい。項目ごとに事務局が補足し進めたい。

「２ 推薦入試の在り方」について
（１）について
［玉川委員］
　現在の推薦基準の他に、将来の職業に生かす目的も入ったが、現行でも推薦基準のスポーツ、文化・芸術活動は分かりやすいものの、「その学校での教育を受けるに足

る能力、適性」の基準は、特に保護者にはとらえにくい面がある。農業、工業の目的意識をどのような形で判断したら良いのか。このようになった場合、中学校側ではその捉え方が課題になると思う。事務局で現在考えていることと、高校側でどのようなところを見て判断するかお聞きしたい。

［髙橋高校教育課長］
　現行でも、盛岡農業は志望する学科の専門分野に関する研究発表の実績やボランティア活動の実績などを推薦基準の一つとしている。紫波総合は総合学科の学習への意欲、盛岡商業では検定などを基準としている。スポーツ・文化だけではないことを明確にしたいと考えた。特に農業後継者や工業技術者等については要望が強かったため書かせていただいた。

［高橋委員］
　事情は学校によって様々であり、学校裁量に任せて様々な基準があってもいいと考える。

［在原委員］
　花北青雲には三つの専門学科がある。今は、スポーツ・芸術のみの基準である。もし実施するなら、学科に関連する資格等を加味し、更に学科としての推薦の割合なども検討が必要である。やはり、県全体で考える必要があるのではないか。

［嵯峨委員］
　農業・工業の文言を盛り込んでいただき大変感謝する。入試制度改善の視点として、地域のこれからを担う人材を育てる一つのシステムの中に高校入試もあると考えたい。
　広く地域の将来を見通して、地元の人材を育てる視点を是非こういった推薦という形でも盛り込んで欲しい。
　また、中学校の校長の立場から見て、前回の入試改善検討が行われた時より、１５歳という子供の成長のレベルが、精神的に非常に未熟な状態で中学校を卒業していく傾向が強くなっていると感じる。今の子供達の成長スピード等も勘案して入試改善を考える必要があるのではないか。

［阿部委員］
　産業教育振興の立場で参加している。学校裁量の拡大で農業後継者や工業技術者等に応募資格が拡大することは大賛成である。地域との共生は高校存続の基盤であり、後継者不足は地域の悩みでありニーズである。ぜひ、スポーツ、文化・芸術に加え、基準として明示して欲しい。１５歳での職業認識は難しいかもしれないが、地域との連携は重要であると考える。

［及川委員］
　今の阿部委員に賛成である。今、小中学校はキャリア教育に盛んに取り組んでおり、小学校段階から自分の生き方を考える機会がある。１５歳の時点で自分の生き方を考えさせることは大切で、そういった観点からも推薦基準の拡大に賛成する。

［谷村委員］

私も大賛成である。今、岩手県ではキャリア教育が盛んである。子供たちが小さい頃から地域の仕事に目を向けていれば、スポーツばかりではなく、商業、工業などの推薦もできると思う。この文言を非常に嬉しく思っている。

（２）について

［川村委員］

（２）推薦合格者に対する学力調査の実施について。基本的に推薦合格者に学力検査の問題に取り組ませる事に賛成である。（３）の校長の学校推薦とも関わるが、スポーツ、文化・芸術についての能力はあるが、学力が不足しているにも関わらず推薦で合格していることがある。このようにレベルを下げた発想で推薦を進めて行くと、高校も中学校も全体としてレベルが下がるのではないか。例えば吹奏楽なら吹奏楽の素晴らしい学校で、自分の力を伸ばしたいので入りたい、しかし学力が高い学校だ。それなら勉強を頑張って吹奏楽もやりたい、というような意識というのは必要ではないかと思う。このように、より高いものを求めるという連鎖を作っていくためにも、やはり基準については厳格に持っていきたい。中学校側では、高校に入って十分に学習に耐えられるような生徒かどうかを判断して推薦をしたい。

［坂本委員］

推薦合格が内定した後の空白の時期がかなり続くわけだが、その期間に学力向上の手当てを講じるべきであり基本的に賛成である。ただ、学力検査問題を活用する場合、合否にかかわらない調査がどれくらいの意味があるのか。方法を検討する必要があるのではないか。各学校ごとに合格した生徒に課題を出し、提出を義務づけるなどの方法もある。

［嵯峨委員］

中学校側としても反省すべきところがある。この制度を中学校がどう受け止めるかという視点で考えたとき、推薦制度を存続させるためにも中学校側の送り出す基準を考えていく必要がある。

［髙橋高校教育課長］

昨年、吉田委員から、スポーツ、文化の基準を満たしている生徒が推薦に合格した場合、学力が伴わないと高校に入ってから学習についていけないケースがあるとのご発言をいただいた。

学力の調査をする事になれば、推薦で合格した生徒は一生懸命勉強すると思う。

推薦合格後の時期は学習意欲が低下し、緊張感を欠くなど、中学校での指導に苦慮しているとも聞く。平成１３年度の全国の推薦入試の状況を見ると、殆ど学力検査を実施していないが、平成２２年度入試では、東北でも普通科、理数科、英語科等で口頭試問を課している。更に来年度からは、佐賀で推薦入試に学力検査を導入するとのことである。本県では学力調査であるが、実施することで、推薦合格者の基礎学力の確保に繋げ、高校での学習に意欲的に取り組めるようにしたい。連携型入試では、来年３月の２４年度入試から、基礎学力の確認として学力検査問題を用いた調査を実施する予定である。

（３）について
［阿部委員］
（３）については「中学校長が」とあえて言う必要はあるのか。

［髙橋高校教育課長］
校長推薦だという確認の意味で載せたものである。平成１６年度に中学校長会から推薦導入の要望があった際、自己推薦の導入の話があり混乱があったため、明確にしたいと考えた。

（４）について
［及川委員］
（４）の一次選考の意味は何か。

［太田指導主事］
志願者が定員の２～３倍を超えた場合に選考の機会を設けることができるとしているが、実際に実施したことはない。
［鳩岡委員］
私は、この（４）の現状分析そのものが腑に落ちない。年明け早々で時間がないから時期の検討はおかしい。これは、あくまで生徒の話ではなく、学校の都合である。こうした文言にすることはいかがなものか。

［髙橋高校教育課長］
東北六県と比較して岩手県は推薦入試の出願時期が早い。生徒の学習への取り組み、中学校からの要望などを考慮してこのようにした。ご意見を伺いたい。

［及川委員］
一次選考を実施しないことにより時期を繰り上げることをわざわざ言わなければならないのか。

［髙橋高校教育課長］
表現、文言を検討したい。

「３　一般入試の在り方」について
（１）について
［玉川委員］
（１）のＡＢＣ選考については、少子化等の影響もあると思うが、当初の趣旨に照らして改善を図るべきである。Ｂ選考については、推薦を導入したために、このようになっている。制度を残しながら、整合性をもって改善を図る必要がある。・

［高橋委員］
高校側にも様々な意見がある。Ｂ選考も含めて学校裁量の拡大は歓迎されるだろう。

［在原校長］
Ｂ選考は中学校生活を重視できる。専門高校ではＡＢ選考が主になるのではないか。

（２）について
［玉川委員］
（２）の定時制入試については、中学校を卒業して社会人になり、中学校の学習内容が難しい面もあるかと思うが、基本的な考え方として中学校卒業程度の学力が、社会で生きて行く上で必要だという考え方も一方ではある。そこが矛盾しないことが必要である。中学校の学習が社会に出て必要のない事だと受け取られないようにしたい。

［清水委員］
現在、本校で働きながら学ぶ者は３割を切っている。しかも、定職者は若干名で、ほとんどがアルバイトである。生徒の低年齢化が定時制、通信制の問題でもある。
一旦学校を離れて、学び直したいと考えても入試の壁があり、特にＡ選考では入れない。勉強したい意欲があっても入れない社会人はいるのではないか。生涯学習の観点からも重要であると考える。なお、標記は面接・小論文・適性検査の順がよい

［髙橋高校教育課長］
ＡＢＣ選考については、校長からのアンケートを踏まえてこの形とした。比率は、今後検討するがすべてを学校裁量とするわけではない。
面接・小論文の順番は清水委員の意見のとおりである。

「４　その他の入試に係る事項」について
（１）について
［川村委員］
（１）の調査書の評定換算点についての意見である。中学校入学時に保護者に入試について説明する。その際、調査書の中身についても説明するが、１年生の学習の記録が入試に反映されないので説明しにくい部分があった。生徒の３年間に渡る中学校生活の状況を評価する観点から、１年生の評定を加えることに賛成である。

［高橋委員］
これは非常に重要な改善内容であると考える。パブリックコメントでも様々な意見が出てくると予想される。受検戦争を助長しないか、という批判も出てくるのではないか。学校側の立場では指導上好ましいと考える。他県では１年生の評価を入れているところが多い。資料を示すことで納得していただけるのではないか。

［坂本委員］
Ａ選考でいうと５：４の比率を変えることになるのか、調査換算点３３０点の範囲内で内部比率を変えるのか。
１年生の評定を加えることについては、中学生の学習の動機付け、意識付けが目的であり良いと思う。今年５月に新入生の意識調査を行ったが、受検勉強を始めた時期は中３の１０月からが一番多く、次は冬休み、夏休み、合わせて６８％という結果だった。少しでも早く学習への意識付けができればと思う。

（３）について
［事務局］再募集は二次募集とする。
（４）について

［東委員］
　特別な支援を必要とする生徒に対する配慮や支援について。
　「特別支援教育が高等学校教育にも浸透しつつある」は、今までになかった表現で記述していただき感謝している。ただ、特別な支援を必要とする生徒の保護者の立場からすると、中学校と高校の共通理解を図ってくださいね、で終わっている感じがする。その後の生活に対する配慮や支援の在り方を検討するとか行うなどという表現も加えていただきたい。

［及川委員］
　「浸透しつつあるなかで」という表現が気になる。高等学校教育における特別支援教育の入学者選抜における、というような表現には出来ないか。

（５）について
［鳩岡委員］
　不測の事態の対応については、新型インフルエンザの際、宮城県は格別な配慮はしなかったと記憶している。宮城県はあくまで健康管理の問題であるという判断をしたのか、岩手県はどうだったのか聞きたい。

［佐々木室長］
　昨年度の新型インフルエンザ流行の際、岩手県は９月議会で受検機会を２回設けることを決定した。理由は、ワクチンの製造が進まない中で、幼児や高齢者の方々を差し置いて、受検生に対してワクチンが十分投与できるのか、という判断が出来ない段階だったためである。
　宮城県はその判断を遅らせたため、優先的に受験生に接種する方策をとった。

［鳩岡委員］
　特定の病名をあげることはどうか？また、文章構成の問題で（４）、（５）以外は現状と課題が一通りあるが、（４）、（５）は唐突な感がある。もう少し丁寧に書いた方が良いのではないか。

［髙橋高校教育課長］
　各県の調査書の資料はホームページに出ているのでご覧いただきたい。
　１年生のうちは自由にスポーツすればいいといった風潮もあるやに聞く。本県は学力向上にも力を入れており、その観点からも１年生の評定を加えることは必要と考える。東北６県では４県が実施している。全国的にも多い。
　配点はパブリックコメントが終わってから検討したいが、３年生の配点が高い方が生徒はがんばるのではとの意見もある。
　特別支援を必要とする生徒への配慮は、中学校との連携が希薄な部分もあるため、書かせてもらった。文言は特別支援担当とも検討したい。

［望月委員長］
　活発なご意見をいただき感謝する。全体としてパブリックコメントに出す際に、色々と更に工夫が必要ということだったと思う。事務局ともよく相談し、本日の意見を生かす形でパブリックコメントを頂戴する形にしたい。

（２）その他
特になし

5　その他
特になし

6　連絡
［髙橋高校教育課長］
次回の委員会は 11 月 8 日（火）を予定。

7　閉会